



現代人形研通信

10号 2025年6月発行

メールマガジンをお送りしているアドレスは送信専用です。事務局へのご連絡は member.gendainingyo@gmail.com へお送りください。

contents

・現代人形研からのお知らせ

公募展要項配布開始

第2回総会準備

継続会費納入のお願い

・インフォメーション

・展覧会リポート

Creative Doll Exhibition — 櫻井真紀子・成沢しのぶ創作人形二人展

Archibras 個展 『にんぎょう と ちいさな おはなし』

微睡（まどろみ）の午後

・私の取り組み

「昨年と今年、二つの個展を終えて」 杉田明十志

・徒然コラム

「週末の旅」 本多厚二

人形公募展

人形研展

Ningyo

Contemporary Ningyo Culture Society

現代人形研

特定非営利活動法人 現代人形文化研究会

作品集

作品募集

作品には、エネルギー、勢い、情熱、静謐。
作り手の手先からこれらが流れ込んで
作者の面影が滲う人形が生まれる。
人形は不思議だ。
不気味さと可愛らしさが同居している。
作者の無意識が一番出やすいものなのかもしれない。

—— 四谷シモン

現代人形研からのお知らせ

「人形研展」 募集要項ができました

12月に当会が東京都美術館で開催する「人形研展」の要項ができあがり、準備が本格化しております。人形とよばれるものを制作される方の作品をすべて受け入れる、都美術館始まって以来の人形専門の公募展です。人形のあり方にふさわしい自由な公募展となるように努めています。

人形研展の募集要項や公募展案内ページでは応募に関する情報を掲載していますが、ただいまFAQ（よくある質問）のコーナーを準備中です。

①募集要項

- ・紙のメルマガ会員の方には、プリントの要項を同封いたしました。
- ・メールで通信をご覧になる方は、こちらのリンクから応募要項詳細をご覧になれます。インターネットの応募フォームも8月13日からこのページから開くことができます。<https://www.gendainingyo.com/koubo>

②ボランティア協力をお願い

当会にとって初めての都美術館での展示となり、多くの方のお手伝いを必要としています。

正会員、賛助会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

【配布】 ご協力いただける方は部数を事務局までお知らせ下さい。事務局から直接相手先に発送もできますので、それをご希望される方は宛先と部数をお知らせください。

【展示スタッフ】「搬入（12/12・金）、搬出（12/20・土）のお手伝い」「会場受付・監視など（12/13～12/20*12/15 休館日）」のお手伝いを募集します。

スタッフに登録できる方は、下記までご一報ください。

メール member.gendainingyo@gmail.com 電話 042-395-7547

第2回総会の案内（正会員対象）

8月上旬に開催通知、事業報告書や活動計算書、委任状などを郵送でお送りします。

正会員（個人・団体）の方は出席（欠席の方は委任状提出）をお願いします。

※第2回総会開催日と会場

8月30日（土）午前 会場 日比谷図書文化館 セミナールームA

詳細の時間や地図は通知のお手紙でお知らせいたします。

継続会費のご案内

これから会員の皆様に以下の郵便物をお送りします。

「継続会費のための振替用紙」「人形研展 公募展要項」

※ただし継続会費をクレジットカード払にされている方には要項のみをお送りします。

郵便振替の方は継続会費を7月26日までににお収めください。送金口座は継続会費のお知らせの手紙に記載します。

・「会費ペイ」で継続会費をクレジットカードで登録された方は、7月26日に自動引き落としになります。もし振替用紙が送られた場合は無視してください。

読書会のお知らせ

読書会『今日の人形』を読む

『今日の人形』（昭和34年 日本経済新聞社発行 編者 近代人形美術会）は、昭和時代に創作人形に関わる方にとってバイブルのような書物だったと思われ、四谷シモン氏もこの本をご存知です。人形とはなにか、人形の新しい表現とは、

という課題を抱え、創作を目指した先人たちの作品や思考、技法などが網羅されています。今の私たちにも共通する問題提起があり、この書を通して現代の人形を見直してみたいと思います。

進行役 榊山裕子

第1回 7月24日(木) 20:00～22:00 第2回 8月21日(木) 20:00～22:00

※毎月 ZOOM にて開催予定です。

会費 無料

用意するもの 特になし 『今日の人形』をもし入手できればお勧めします。古書なので、できない方は毎回、とりあげるページの PDF を閲覧できるようにします。

参加資格 当会の賛助会員・正会員 ZOOM に接続できること

申込み方法 メール member.gendainingyo@gmail.com までお申込ください。ZOOM の招待メールを送ります。

前日まで受け付けますが、勉強会で読むページは事前に読むようにしておいてください。

※『今日の人形』の価格は 1000～3000 円台で古書店で扱われています。

参考 「日本の古本屋」サイト <https://www.kosho.or.jp/>

年会誌 原稿募集

当会では年に1度、アーカイブ誌を発行します。

第1号は、令和6年度(2024年7月～2025年6月)が対象です。通信の原稿を選抜したアーカイブが中心ですが、この他に会員の皆様の原稿を募集します。

試論、論文、エッセイなど、お書きになりたい内容がありましたら、事務局まで郵便かメールでお知らせください。

文字数などの詳細を打ち合わせさせていただきます。〆切は7月末日です。

編集委員募集

当会編集委員会では、編集委員を募集しています。賛助会員、正会員のどちらでも、通信の編集に関心のある方はお申し出ください。原稿依頼、整理、デザイン、企画など、できる時間・範囲で関わっていただければ助かります。

条件 メールで連絡のやりとりが出来る方

関心のある方は事務局まで、ご一報ください。

インフォメーション

展覧会情報

LUCKY NUMBER 土屋さやか個展(造形)

7月2日(水)～12日(日) 11:00-18:30(最終日17:30まで)

ストライプハウスギャラリー 東京都港区六本木5-10-33-3F

Tel:03-3405-8108 URL <https://striped-house.com>

人形彫刻 戸田和子展 神秘の森の精霊たち

4月26日～11月10日 9:00-17:00 水曜休館(祝日の場合は翌日)

妖精美術館 福島県大沼郡金山町大字大栗山字狐穴 2765

TEL 0241-55-3180 入館料/大人(高校生以上)300円、小中学生200円

MISOROGI 人形展

8月27日(水)～9月2日(火) 9:00～21:00(最終日は15:00閉場) 入場無料

丸善・丸の内本店4Fギャラリー TEL 03-5288-8881

主催 羽関オフィス URL <https://misorogi2025.nonc.jp/>

出品作家(予定) Archibras、飯野モモコ、ウエノミホコ、牛平安代、En、おぐらとうこ、クサボン、月光社、コスゲヨウヘイ、コリスミカ、杉田明十志、Noe/高橋野枝、長岡哲生、中澤忠幸、西村 FELIZ、林リウイチ、張り子人形のやま、土方智香子、細貝まい、本多厚二、ミヤタケイコ、山吉由利子、吉村眸、とくいあや、マンドラゴラ、ユリア・プラスコヴィッチ、アリョーシナ、ケイティ・レイン、マーシャ&スヴェータ・ザブロッキー

展覧会レポート

Creative Doll Exhibition

櫻井真紀子・成沢しのぶ 創作人形2人展

4月18日～4月22日 プレーメンハウス浅草

※本展のレポートは本人の執筆によります。

成沢しのぶ

デザイン学校の同級生だった桜井さんの自作のお人形があまりにも可愛くて欲しかったのですが、当時の私には少々高額だったので自分で作るしかないかと思い人形作りを始めました。暫くして、ネットで探した柴倉一二三先生の教室に入校し、球体関節人形の技法を一から習いました。先生は基本になる事や大切な事はビシッとしっかり教えて下さいます。各々の個性を活かした作品作りを指導して下さる先生です。

教室の仲間と「そろそろグループ展を！」と計画していたのですが、さまざまな理由で延期となり、

その都度ギャラリーに日程の変更をお願いして実現したのが今回の奇跡の二人展でした。

「四月の風は人形たちのささやき」という共通のテーマで、統一感のある展示が出来たのは、作風は違えど桜井さんとの二人展だったからこそと思っています。

自分のイメージに近い形で仕上がった作品は『4月の兎』と『天体観測犬』ですが、一番思い入れのある作品は『THEO』です。ギリシャ語由来で“神様からの贈り物”という意味を持たせました。

人形のボディにペイントや別の鉱物をまとわせるような表現は前々からしたいと思っており、今回は植物や生き物がいいかな、というイメージで描き始めました。THEOは飼っている猫の名前でもあります。ちょうど仕上げ段階の頃、THEOが体調を崩して余命宣告を受けてしまい、制作中はいつもそばに置いて祈る気持ちで制作していました。

生も死も同じ場所に在るというイメージで、ボディには生き生きとした植物や生物と、死んでいく花（白いレースの花）などを描いています。まだ未完成でバランスや細部にもう少し手を加えたいと思っています。

櫻井真紀子

10代の頃、康辺ヤコさんの手作り陶芸人形という本で、粘土人形制作の面白さを知りました。その後関節人形の世界に出会い、渡邊素子先生に師事しました。日本人形の美しさにも惹かれ、伝統工芸士新倉綾子先生にも師事しました。

以降、なるべく多くの様々な美術品を観るよう心がけ、色々な物を自分に取り込んでおります。

今回出品した作品の中で一番見ていただきたいのは『はるつげ』という作品です。

現在大きな戦争や紛争が絶えず起き、多くの犠牲者が出ています。特に子供達が苦しむ姿には本当に心が痛みます。

その氷のような世界に『はるつげ』が現れ、氷をとかし、川となり、花々が咲き、やがて大地に光が満ちあふれる。

当たり前にあった穏やかで美しい日常が、一日でも早く訪れますようにとの祈りを込めた作品です。

生きていくうえで、多くの喜びと共に多くの困難が人間には待ち受けています。

困難に立ち向かわざるを得ず、疲れきった時、心地よい空間に私は幾度となく救われてきました。

小さなギャラリーもその一つです。



左「THEO」右「4月の兎」

「光」、「風」、「ささやき」、「小さな歌声」、「ひそひそ話」。人形達と瞳があえば、小さな会話が生まれ小さな物語が始まる。そんな私達の世界観が詰まった小さなギャラリーで、今回観て下さった方々の心から、穏やかで優しい気持ちを、ほんのひと時でも引き出すことができたとしたら、嬉しい限りです。今後の予定はまだありませんが、今回を機に定期的な発表ができればよいなと思っております。



「はるつげ」



「けはい、うみとそらのおもちゃばこ」

Archibras 個展 『にんぎょう と ちいさな おはなし』

4月27日～4月29日 art space ouro (吉祥寺)

レポート 井桁裕子

去る4月、Archibras こと、かくまつちえこさんの個展に行ってきた。

どことなく手作り感の漂う居心地良い会場。色とりどりの作品たちはどれも細やかな手作業で縫われたり刺繍されたりしていて、まずはその個性的な造形の味わいを楽しんだ。

気分が馴染んだところで、作品のタイトルがスペイン語だったりすることに気がついた。

緻密な血管のような刺繍を施した作品のタイトルは《Cruz grande (Sangre Y Lágrima)》(大きな十字架 (血と涙))。

「 祈りというものは全身をくまなく駆け巡るもので

つまりは、液体に溶ける性質のものだと考えられます。 」

という言葉が作品に添えられていた。

全身を駆け巡る祈り！ 毛細血管から噴き出さんばかりの熱い血潮、溢れる涙！

スペイン語のタイトルから中南米らしいイメージが膨らむ。

「ちいさな おはなし」の個展タイトルの通り、作品に添えられた豆本には小さな物語や詩が書かれている。

作品にはお祖母さんの遺品の布を使うこともあるそうだ。お祖母さんは紅型を習っていて、自分で反物を染め、それで七五三の着物など作ってくれたという。着物の残りや紅型の試し染め、「ひいばあちゃんの代からとってあった」端切れなどが一緒に丁寧に保管されていて、かくまつさんはそれを受け継いだとのことだった。

メモ帳が作品になっているものもあった。特に魅惑的だったのは表紙に丸い乳房のついた《Mujeres (女性たち)》。

かくまつさんはメキシコ南西部チアパス州のレニャテーロス工房 (taller Leñateros 紙すき、版画、製本の工房) に滞在していたとのこと。

写真の人魚の座る海は写真では螺細細工に見えるが、これは実は表紙に CD のかけらを貼った、レニャテーロス工房を紹介し

た「ALQUIIUMIA (錬金術)」という本だ。

——民芸品のような素朴で無垢なものに憧れるが、自分がその真似をするということではない……とかくまつさんは言う。

——リサイクルとか、勿体ない精神とか、そういうのとも違う。

わかっているのは、古いものを使うことや古くからの型を愛でることで、「時間」をもらっているというか。

あとは私の「今」が、何を作れるか？ というだけで、その「今」がどういう形で出てこれるのは、全然見当がつかない。でも、私から出てきたものが、メヒコの民芸や世界各国の古物と語らうことのできるようであってほしい…… ——

そのように伝えてくれた通り、かくまつさんの作品は人生の中で出会ったものが豊かに息を吐いて、素直な自由さと親しげな秘密とが感じられると私は思った。

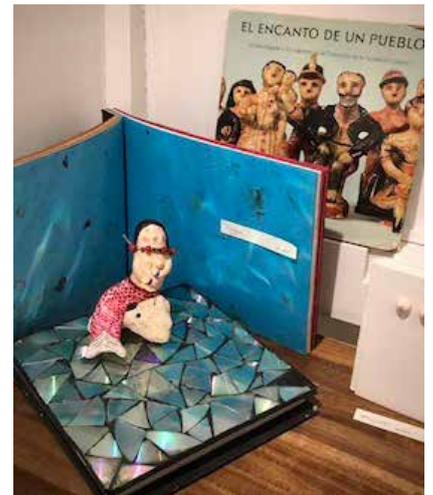
小さな展示室の中に、思いがけないほどの奥行きのある世界が広がっていて、いくらでも楽しめそうだった。



《Cruz grande (Sangre Y Lágrima)》(大きな十字架 (血と涙))



会場風景



人魚の人形



豆本には、小さなおはなしが書かれている



《Mujeres (女性たち)》

まどろみ 微睡の午後

5月17日～5月25日 ストライプハウスギャラリー

レポート 羽関チエコ

エコール・ド・シモンで出会った三人がグループ展に挑戦。しかし、出品予定のさいとうなおこさんが直前に入院を要する怪我を負い、出品を断念されました。新作4点と旧作4点を出品予定で、新作の上塗り胡粉をするところだったそうです。そこで急遽、智恵さん、神田光子さんの二人展としての開催となりました。二人は旧作を加え、神田光子さんが7点、智恵さんが8点を出品し展示を整えました。

智恵さんはエコール・ド・シモン開校2年目から四谷シモン氏に師事したベテランで、張り子の関節人形はいうまでもなく、桐粉やビスクの技法で、可憐な少女人形をそれぞれの技術で仕上げています。展示のタイトルにあわせて、午睡でまどろむ少女をイメージして制作した新作を、手作りの布花等で豪華に飾り上げていました。

神田光子さんの作品は、過去のエコール・ド・シモンでも戦時中をテーマにした作品で際だっていました。戦時中に18才だった母親から当時の話をよく聞いていた神田さんは制服ものが好きで、特に思想があるわけではないが大正、昭和のストーリー仕立て人形を作ることが多いそうです。自己流で作っていたけれど2008年に本屋で四谷シモン特集のある雑誌を見つけ、シモン門下に。

鈴木清順のツイゴイネルワイゼンや三島由紀夫の金閣寺が好きで、神田さんにとって妄想の世界を形にするには平面より人形のほうが良いそうです。古い布地だけを使い、ひとつずつこだわりを追求しながら長い時間をかけて構想を練ります。

「古いヴィラにて」は、戦時中なのにおしゃれをしている。終戦の話を聞いて呆然としている情景を描いています。

神田さんの作品は、2020年に写真家の豊浦正明氏が撮影した作品集「霧之夜之幻燈會」でも見ることができます。

それぞれが余生を考える世代で好きなことはやり続けないと、と今後にむけてお二人とも意気盛んでした。



智恵作品展示風景



神田光子作品展示風景



智恵「まどろみ」



神田光子「古いヴィラにて」

私の取り組み

昨年と今年、二つの個展を終えて

杉田明十志

理事や会員のフリーコラムです

いままでに幾度も、“もうこの展示で終わりにしよう、終わりでいい”、と思う時があったけれども、一つの区切りを終える度に、何かしら思いもしなかったものを得ることができて、もう少し続けてみようという思いが再び生まれ、今日まで制作を続けてきた。

2001年と2002年に“最後の”個展を行ったとき、自分のためにやるべきことはすべてやった、という思いが強かったので、それ以後個展をしていなかったけれども……絵を描いたり、人形を作ったりすることは、自分が外の世界と関わる時に、心が直接世界と触れることを防ぐ仮面、あるいは衣服のようなものだったのかもしれないが、いつしか本当の皮膚のように、心と一体になっていたようだ。

普段はその“皮膚”を介して世界と関わっているのだけれども、その“皮膚”を介する関わりにもどかしさを感じることもある。どこかで、心の芯あるいは根に近い所の何かを表さなければ、いつか心が疲弊し枯れてしまうのではないか、とっていた。

昨年五月に静岡の亀山画廊で、今年四、五月に埼玉の山猫軒で、二十数年ぶりに個展をさせてもらった。以前から声をかけていただきながら、心が個展に集中することができなかつたのでずっと先延ばしにしていたけれども、なにもしなかつたら本当にこのまま心が枯れるという危機感が強くなり、漸く心と体が動き始めた。

山猫軒は私の初個展（1993年）の会場だった。2000年に三回目の展示をして以来、今回は25年ぶりの四度目の展示で、“帰って来た”という思いが強かつたので、今手元にある作品をできるだけ多く、およそ100点の作品を展示させてもらうことにした。（一番古い作品は、幼稚園で作った『えんぴつたて』）

最初期の石塑粘土による球体関節人形、糸引きの胴の衣装人形、木彫胡粉彩色の御所風人形。レジン胴と桐塑胴の木目込み人形。木彫と桐塑のあやつり人形。様々な素材による表現と表情の作品を見ていただけたと思う。

静岡の展示では、三年ほど前から描き始めた肖像画の連作も合わせて展示させてもらった。“心の芯に近い所”から生まれた作品で個展には必要な要素だったけれども、悲しい表情ばかりでちょっと画廊さんを困らせてしまったので、山猫軒では小さな絵を三点だけ展示することにした。

しかしそうすると、今の自分の大事な部分が少し足りない……その欠けを補う何かが必要な気がして……頭に浮かんだのは、心の象徴としての割れた鏡の破片だった。



左 球体関節人形 少女 1992

右 球体関節人形 星祭の少年 1991



ギャラリーカフェ「山猫軒」での展示風景 鏡の破片もみられます

以前、心が悲鳴を上げていたとき、割れそうな心を表に出さぬようにしよう、どうにか修復をしよう、ともがいていたことがあったけれども……もがいてもどうにもならない……。どうにもならないなら……もうこのままでもいいんじゃないか……割れても、何も見えなくなったり、何も感じられなくなったりするわけではない……割れたままでもまだ“ちゃんと”生きているんじゃないか……と思うと少しだけ救われた気持ちになった、その時の心の象徴として、会場の各所、作品の足元に割れた鏡の欠片を置いてみた。



聞こえない歌を歌う天使-『菩提樹』(少女) 2023

鏡の欠片を置いた時、その強い存在感にちょっと戸惑った。もしかすると人形の鑑賞の邪魔をするかもしれない、と思ったけれども……これは自分にとって必要なものと思い、置かせてもらった。

鏡の破片は、心の奥に通じる“皮膚”の亀裂だったのかもしれない。

二つの個展を終えて、個展の前には“これが最後”という気持ちもあったけれども、また少し、もう少し続けてみたいという気持ちが生まれてきた。

杉田明十志人形展 2024年5月2日～5月13日 亀山画廊 (静岡県静岡市)

杉田明十志人形展 2025年4月5日～6月1日 ギャラリー&カフェ 山猫軒 (埼玉県入間郡越生町)



木彫りのあかちゃんーめばえ 2019

理事や会員のフリーコラムです

6月最初の週末は関西へ。

車中泊後、翌朝、京都小町湯で日曜朝風呂で背中に立派な龍の彫り物のある人を見たあと、「アンゼルム・キーファー ソラリス」展が開催されている二条城へ。

キーファーというと爆撃機？ など断片的印象でしか知らなかったのですが、映画『アンゼルム“傷ついた世界”の芸術家』を観ると今回、作家のどの部分をみせているか、また、みせていないかがわかる気がしました。映画は、戦後ドイツを代表する芸術家であり、ドイツの暗黒の歴史を主題とした作品群で知られるアンゼルム・キーファーの生涯と、その現在を追ったドキュメンタリー。監督は、ドイツの名匠ヴィム・ヴェンダース。

本展は「二条城という場所、ソラリス、金箔、錬金術・・・絵描きというもの、等々」美意識につつまれた空間ですが、観光地での展開で30分ごとの予約制の運営は消滅していて、入場制限はなく、かなりの観客でした。会場にはテキストはなく作品だけ観ると「傷と痛み」よりも、空間と美意識にフォーカスされている気がしました。

徳川家の権威誇示に使われた襖絵絵師の仕事との対比を期待したいところでしたが、そこは大人の対応というか、観客の見識にあわせて鑑賞可能というところでしょうか。ともあれ素晴らしい展示でした。撮影可能でしたので、動画はいろいろ観られると思います。たっぷり見学して記念に足元の梅を一個、拾って帰ってきました。



アンゼルム・キーファー：ソラリス展

それから二つの会場へ。偶然ですが3カ所とも、「傷と痛み」が表現に含まれていて、空間が日本家屋という点でも共通していました。

高垣リミ展「Silent March」の展示作品は、漆の染み込んだワタ(漆工場では工程上出される素材)や木材、磁器を素材とした造形。

山羊たちや壁に埋め込まれた少女の下肢など。少女の下肢については自分には知りえない感覚として、トラウマやカミングアウトといった言葉を想像しました。作者はバレエ経験があるとのこと、その記憶やリアルな感情は渦中では表出できずに、遠く過ぎ去ったあとに表現可能になるのではないのでしょうか。



高垣リミ

(とくいあやの「蟻の家」も震災で動物作品が作れなくなった時の作品です。当時は摂食障害だったことを隠していたのですが、先日、あの作品は空洞の自分から世界に侵食、突破する内的イメージだったのではと回想しています。まだ障害渦中に制作、出品したファンタニマ「ノミのサーカス」のノミの体毛の表現を経て、MISOROGI 展の髭がのびた女性の人形で、はじめて摂食障害のことをカミングアウトしています。)

この展示での作者の意図はわかりませんが、自分の中で未知の領分を想像させてくれました。作品鑑賞目的の来場者と併設のカフェ目的のグループの反応の違いも感じました。

次に訪れたのは二人の劇団 kondaba (石原菜々子、金子仁司) による『棟梁ソルネス』。会場となった大内木工所跡地は、廃屋取り壊し間際のような空間です。朗読劇で役者も演技しますが、同じ役の人形が同時に視界に存在し、二重に演出が折り重なっていきます。

逃げずに"遊び"を突き詰めていくような贅沢な時間でした。刺激を受けました。30人くらいで満席の観客との対峙も空間の密度を感じました。



kondaba のイメージ (画 本多厚二)

工芸や料理、一部の音楽では「傷と痛み」がほぼ表現されない。一方で、演劇、彫刻、映画、文学、詩、マンガ、アート、またこれらと結びついた音楽には、それが存在する気がします。

自分はといえば、これまで遊具関連のデザインやイラストばかりだったので、それを要求されることも少ない。地球環境に関する書籍イラストなども手がけ、学生時代は彫刻を専攻しましたが、まだ若く自分が子供で世の中のこと、自分のことも理解できなかったため、その資格もないように感じていました。

「傷と痛み」人形に関してはどうでしょうか。

人には無視できない社会状況があり、意見が分かれる部分だとおもいます。

美意識に隠されたものとして、リアルなものとして、まったく反映してない空っぽな表現、などにそれを感じることもある。

逆に偽善的なものや、稚拙さを誤魔化す道具として、コンセプトという魔物？ を満足させるものとして、感じる場合もある。

でも、ほんとうのことはわからないほうがいいのかも。

ただ、想像する自由はあったほうがいい。個人が世界とつながれる今、「傷と痛み」も本人しか知りえない、記号化でない感覚領域に出会える可能性が個人の創作にはまだまだ残されていると感じました。

アンゼラム・キーファー：ソラリス 2025年3月31日～6月22日 会場：二条城

<https://kieferinkyoto.com/>

高垣リミ インスタグラム <https://www.instagram.com/rimitakagaki/>

会場 河野邸 <https://www.kawanotei.com/>

『棟梁ソルネス』kondaba <https://kondaba.tumblr.com/>

とくいあや作品はインスタグラムで見られます <https://www.instagram.com/ayatokui147/>